

本学受け入れ協定留学生向け言語教育プログラムの包括的実態調査

武蔵野大学 ランゲージセンター 高橋桂子
和田晃子 小倉文根 大平寛実 窪島渚



本学は海外協定校から迎える交換留学生を「協定留学生」と称し、身近にいる、海外からの隣人として迎え入れ、正規留学の学生および日本人学生とともに学ぶ機会を提供してきた。「協定留学生」は、本学ランゲージセンター所属となり、ランゲージセンターが提供する語学研修を目的とした講座を受講する他、語学要件を満たせば、正規留学生と同じく、専門科目が履修可能である。2020 年から 2022 年までコロナ禍のため受け入れゼロが続いたが、2023 年はコロナ禍前を上回り、のべ 11 カ国、41 校、78 人の学生を受け入れている。

世界中の教育機関が、新たな試みを進めた 2023 年であったが、オンライン上で双方向性のある日本語の学習機会が劇的に増えた今、「日本に来ないとできないこと」をどうやって提供するかは、改めて実態調査を行い、プログラムの改善をする必要がある。そこで、本学講師、本学国際課職員の方と協働し、始めたのが本研究である。

①海外協定校の調査 インタビュー調査

(韓国：培材大学校 台湾：東呉大学、中国文化大学)

本学の講座では、初級の学生も含めて、日本文化や日本語での体験そのものと言語を統合した授業を全て日本語で行っていたが、台湾・韓国とも、日本文化・歴史、日本事情、地域研究に関する授業は現地の言語で行われ、日本語は技能別に学び、日本でも一般的となったタスク型学習を取り入れた科目は少なかった。本学の開講講座へは、留学期間終了後のインターンシップ参加や就職活動に備えてのビジネス日本語を学ぶ機会を作ってほしいとの希望があった。

②学内質問紙調査

(学生の授業に対する意識)

留学理由は「日本での体験」が目的であり、日本語を学ぶ理由は「卒業後、日本語を使う仕事をしたいから」が過半数を超えた。授業に対する満足度は高い数値が示されたが、上級者ほど日本語力の伸びを感じられないと考える傾向も見られた。

本研究を通し、「協定留学生」が何を既に学び、本学での経験を経て、どのような将来の希望があるかを確認することができた。2024 年度はこれらをもとに、内容統合型だけでなく、上級をめざす学生向けの聴解・読解クラス、さらにビジネス日本語も開講する。新規開講講座および改変する既存講座の実態調査を継続研究対象としたい。